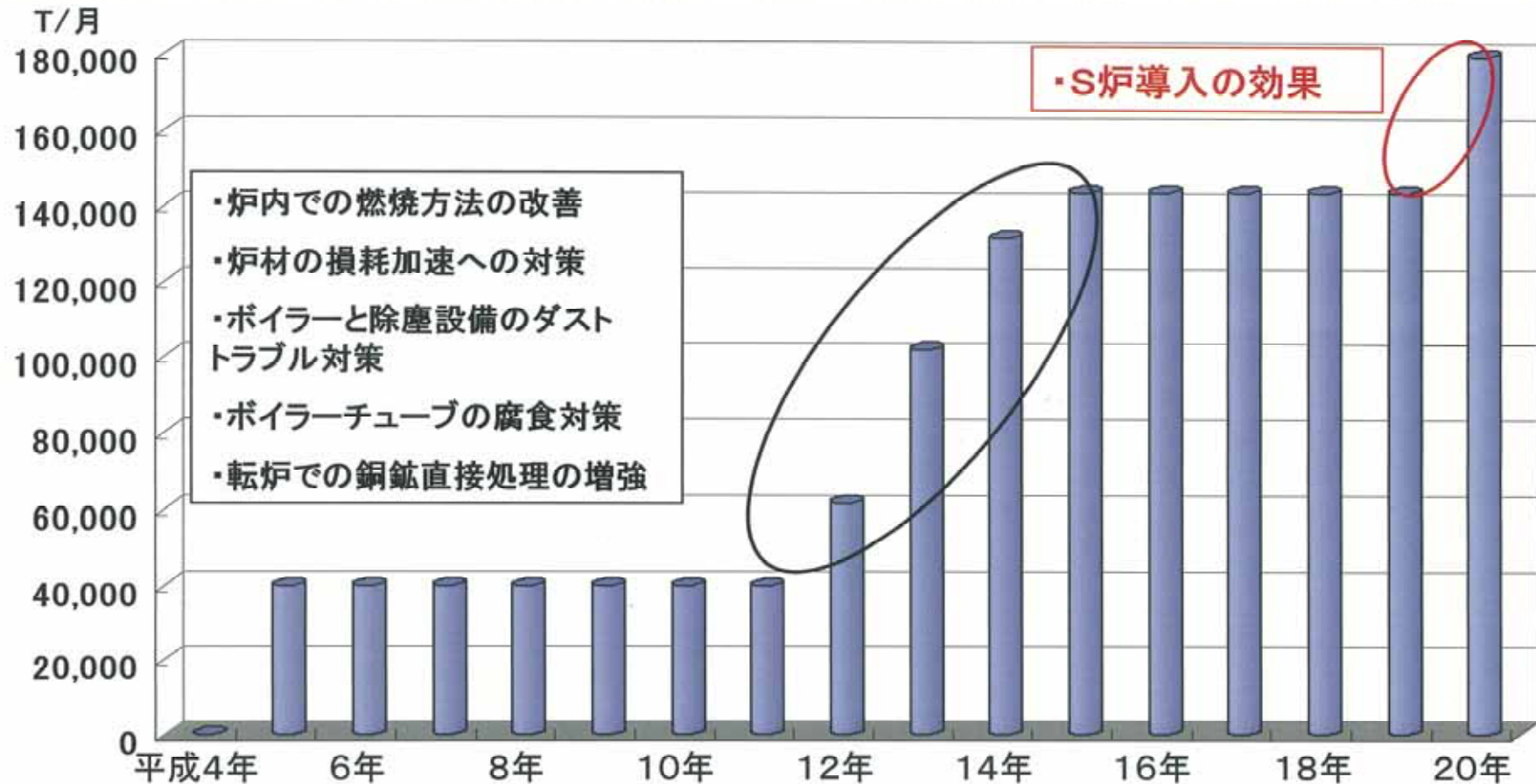
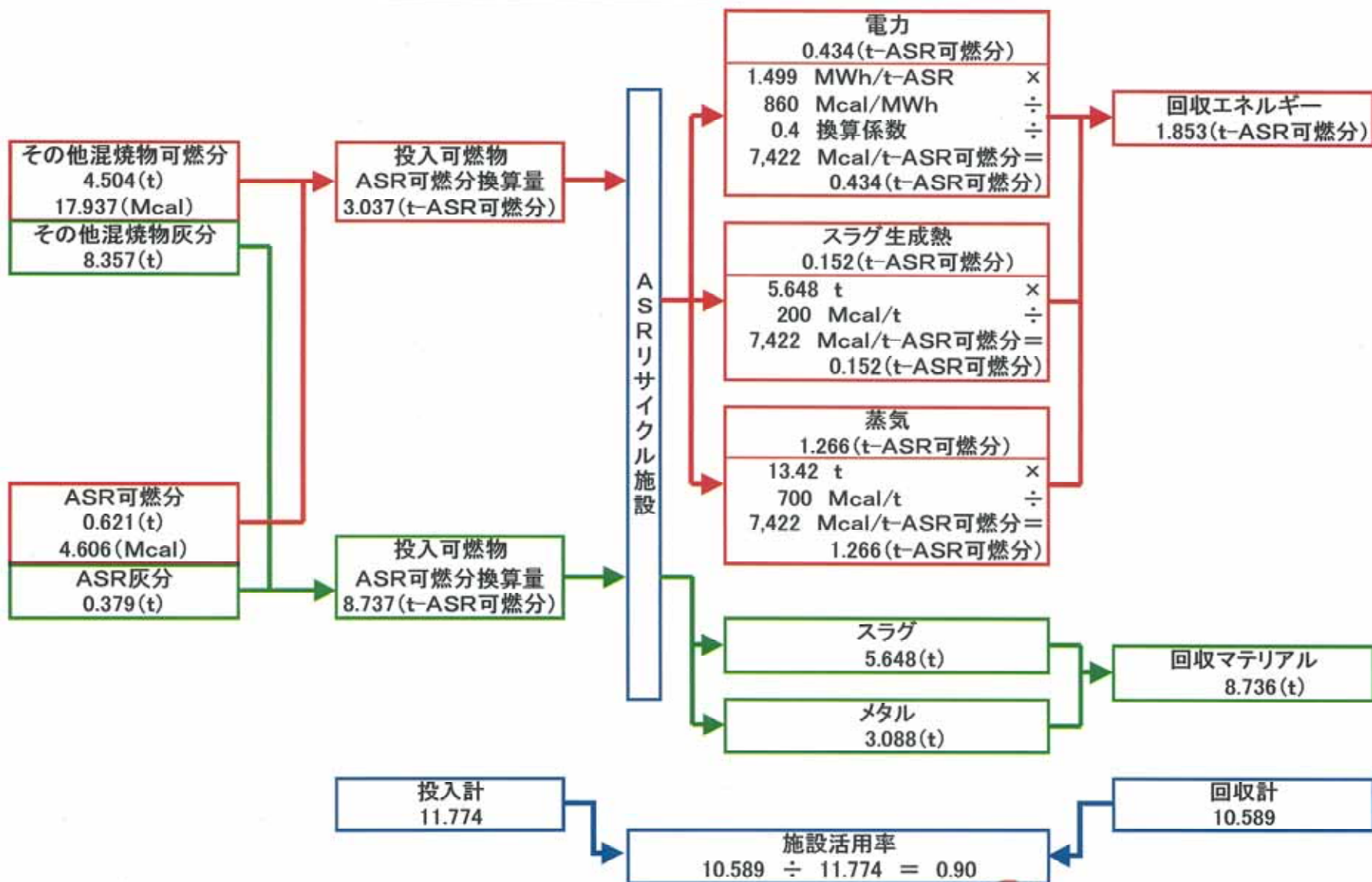


シュレッダーダスト処理能力推移



ASR投入施設活用率



施設活用率の妥当性

- ・回収エネルギーとしての電力の評価が低い。

リサイクル施設の基準として「ASR投入施設活用率」という指標が規定されているが、電力をASR換算する際に用いる発電効率を、商用火力発電の効率である0.4としている。廃棄物燃焼による発電の効率は一般に低く、本計算に用いられている発電効率40%は高過ぎる故、発電すると回収エネルギーが少なく計算され、施設活用率が小さくなる。

当所の場合、蒸気1t当りの発電量は 0.21MWhである。蒸気が700Mcal/tの評価ならば、発電効率は、

$$0.21\text{MWh/t} \times 860\text{Mcal/MWh} \div 700\text{Mcal/t} \times 100 \doteq 25\%$$

とすることで、少なくとも蒸気と同等の扱いになる。

発電効率を40%から25%とすることで施設活用率は、0.90から0.92に向上

今後の課題：ASRリサイクル率

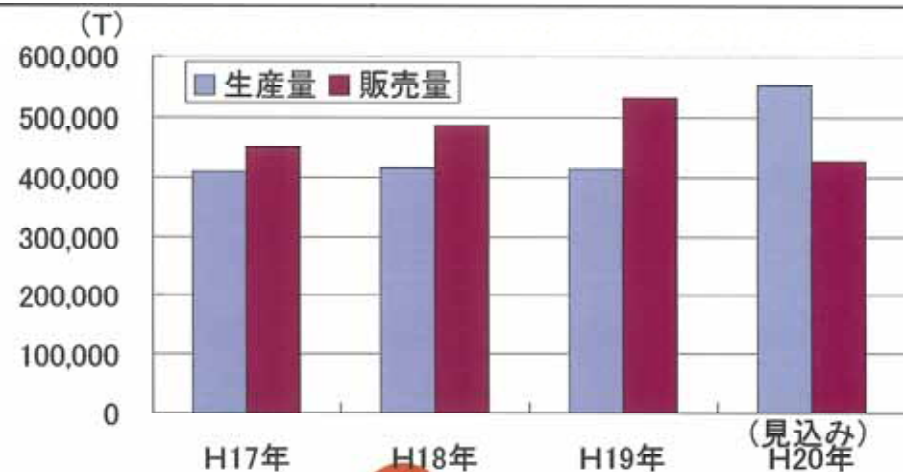
$$\text{リサイクル率} = \left(\frac{(\text{ASRリサイクル施設投入量} - \text{ASRリサイクル施設排出残渣量})}{\text{ASR引取量}} \right)$$

$$\text{ASRリサイクル施設排出残渣量} = \text{ASRリサイクル施設生産物排出量} - \text{生産物販売量}$$

- ・ASRリサイクル施設生産物排出量は、スラグ生産量があてはまる。スラグについて法施行後、昨年までの累積は、生産量<販売量で、“100%を超えた”リサイクルを実施してきた。今年度を含めた累積ではやはり、生産量<販売量であるが、今年度単年では、市況により生産量>販売量となっており、リサイクル率が低下していると見做される。

累積(長期的)には、生産量≒販売量であるが、

年度(短期的)には、生産量<販売量となる場合もあり、過去の積重ね分部分が評価(リサイクル率の算出に反映)されない



終